1. 検証の視点

これまでに整備を行った施設や情報伝達のための体制などは、今回の台風においても効果を発揮したと考えられる。そこで、避けるべき被害を確認し、対策の評価を行うことで、対策の不足していた点や改善点などを整理することができる。

加えて、これまでに整備した施設が十分な効果を発揮するためには、適切な維持管理が重要であり、各施設の維持管理状況の評価を行うことで不足していた点や改善点などを整理することができる。

このため、今回の検証においては、以下の３点を検証を進める上での視点とする。

(1) これまでの取組みによる減災効果の発現状況

前章における過去の被害など、西濃地域では、多くの水害が発生しており、その被害を少しでも減らすために対策が講じられてきており、現在も引き続き、被害を減らすために、河川の改修や下水道の整備、排水機場の整備などを行っている。

今回の台風第 10 号災害では、近年稀に見る記録的な豪雨となり、大規模な浸水が発生したが、これまでに整備を行ったもの及び現在整備を進める河川や施設などは、今回の災害においても効果を発揮していたと考えられる。

現状を理解し、今後行う対策につなげるために、整備を行ったもの及び現在整備を進める河川や施設などの内容をまとめ､今回の台風においてそれらが発揮した効果について、分析・評価する。

(2) 維持管理状況

これまでに整備を行った施設などについて、その効果を発揮するために、常時における維持管理を適切に実施する必要がある。

今回の台風第 10 号災害の被災前に排水機場などの治水施設の適切な管理が行われていなかった場合、施設に期待する効果が発揮されていなかった可能性がある。また、取水ゲートなどの利水施設の適切な管理が行われていなかった場合、被害の発生や拡大につながった可能性もある。

このため、日常の管理施設の運転や操作条件、稼働・操作状況について、分析・評価する。

(3) 更なる減災に向けた取組み

前述の「これまでの取組みによる減災効果の発現状況」､「施設の維持管理状況」の視点から分析・評価を行い、明らかとなった課題に対して、更なる減災を目指し、対応や方向性を検討する。